



# 政治 I

2010 夏学期

ご存知の通り、高橋氏はまともに板書をしません。彼が口頭で喋り倒したことを書くどうしても量が膨大になってしまう。なので適宜内容を削って使ってください。WordだとPC上で削れるかも知れませんが色々ズレてわけわかんなくなるかも知れません。一応ただ見るだけなら絶対にズレないPDFの方をおすすめします。っていうか普通に他のクラスの使ってください(笑)あと、最初のほうはクオリティが低いかもしれないのであしからず。わからないとことか変なところがあったら聞いてね。

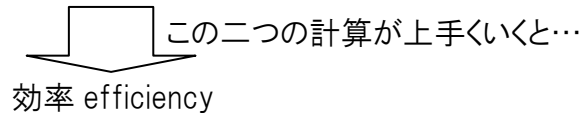
※以下用いられる記号について

Ex. : 例えば

Cf. : 参考

## 001 政治学的思考法とは何か？

(1) 経済学的思考法で考えること＝利益 benefit と費用 cost

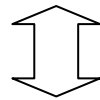


(2) 社会学的思考法

Ex. ● 現代アメリカの社会学の重要テーマ—role theory  
役割



● 社会心理学に登場する概念—帰属意識 identification



※"identification"に対してこの訳を用いるのは  
社会心理学のみ

Membership group＝事実として帰属する集団

(3) では、政治学的思考法—権力 power がはたらく

政治は一人では実現しない

- 権力 power や政治的指導力 political leadership のある者の命令で、みんなの役に立つものを、みんなでつくりあげる。
- 意見の食い違うものとどうやって共生 symbiosis するか。
- いかに協働 cooperation するか。

010 政治科学 political science

011 歴史的3類型

※哲学者、政治学者の区別は途中までなかった。

Ex. アリストテレス、ロック、J.S.ミル…

(1) 政治哲学—philosophy…時代が混乱すればするほど重要となる。

- 規範的 normative = ~であるべきだ
  - よりよい規範とは何か。
- 対立 → 事実
- Ex. 「むやみに人を殺してはならない」
- 「誰でもいいから殺してみたかった」
- ここに考えるのが政治哲学

(2) 政治イデオロギー

信念 = 価値複合体

- 中世末期におこり、現在まで続く。
  - 政治哲学より practical—実際の、実践的、実用的
- Ex. ボーダン：絶対主義擁護。“主権”という概念作り出す。貴族の封建的特権を廃止して、  
国王に権力を集め近代国家をつくる、という考え方。  
絶対王政確立のためのイデオロギーを打ち立てる。

ロック：国民主権を主張

ルソー：人民主権を主張

Cf. 「悪法も法なり」

政治イデオロギーではそうは考えない。  
悪法は変えるべきだと考える。

(3) 政治科学

- アメリカで発達
  - 経験的 empirical 学問
- ※(1)政治哲学(2)政治イデオロギーは価値重視
- 現実をもっと研究しよう。観察、考察、…

(4) 注釈

- (1)も(2)も重要である。
- 上記の3類型は理想型 ideal types による類型

理想型  
=学問の道具として使うための類型  
現実に存在するのではない。  
Ex. 「あの人は怒りやすいタイプの人だ」。

現実に存在する類型  
Ex. ハイブリッド自動車、電気自動車、…

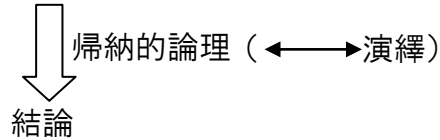
## 012 政治科学＝現代政治学

### (1) 特徴

1. 事実と規範の分離 → 原則として規範・価値の問題には立ち入らない。  
これまでの政治学が重視

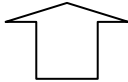
- 価値自由性(価値中立性)＝あらゆる価値から中立の立場を保つ。  
※提唱:ウェーバー(独)

2. 経験論 数多くの事実・データを集めてくる。



3. 学際性 inter disciplinary(※discipline＝学問分野)

- 他の学問から借りられるものは借ります、という立場。  
Ex.経済学、心理学、…



◇ 対象(政治)は複合的だから。  
◇ 政治科学が science として出発できたのが一番遅かったから。  
(ちなみに一番早かったのは心理学)

### (2) 現代政治学の流れ

1. 行動論革命 behavioral revolution

- 人間の行動を観察しよう。 → 一番成果があったのは投票行動の研究。  
ただし、成果をあげればあげるほど、限界もわかってくる。



#### ラディカル左翼からの批判

- 「客観的に政治を研究して、何の意味があるのか。」
- 「人々の幸福、福祉につながらないだろう」
- 非政治的政治学 apolitical political science にすぎず、  
現実の政治を変えることはできない。

2. ポスト行動論主義 post behavioralism

- A) 保守派 — 社会には自由意志をしばる、規則や慣習(=制度 institution)がある。  
→その”制度”をまず取り除くべき。

Cf.制度論 institutionalism

=人間の行動を縛る様々な制度が世の中にはある。

行動論主義:人間は(少なくとも先進諸国では)  
自由意志にもとづいていると前提。

反論

反論

- B) リベラル左翼

- 人間の行動は自由意志の発露であるべきだ。(ここは A)と同じ)
- ただし、すべての制度が悪いわけではない。
- むしろ多くの制度は過去の過ち、失敗をふまえ、二度と繰り返さないために作られたもの。  
それぞれの制度が何故どのように作られ、発展してきたのか、その歴史を知るべき。

=歴史的制度論

※保守派は合理的制度論

人間の持っている合理性を信じ、それにまかせることを主張

3. 注釈

- post … 「終わった、過ぎ去った」ではなく「経験した」ぐらいの意味。

Ex. Post war = 戦争を経て、後の…

⇨ 行動論否定ではない。

(3) 注意すべき点

1. ひとつの体系をもった政治学が確立されているわけではない。
2. 科学=価値中立? Cf. T.S.クーン『科学革命の構造』

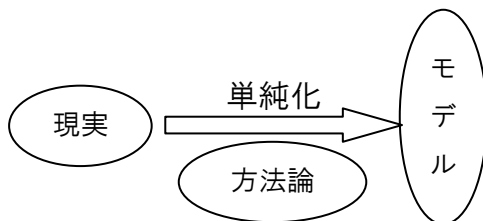
Paradigm=考え方の枠組みが変わると  
何を見るか、どう考えるのかが変わってくる

Political science の中でも paradigm の違いがある

(4) 注釈 theory には2種類ある。

1. モデル model … 複雑な現実をある視点に従って単純化してみせる。
2. 方法論 methodology … 現実を単純化するときを使う道具、集団。

これをどうするかが方法論



## 100 意志決定の基礎理論

## 110 利益関心 interest

## 111 概念

## (1) 基本的な考え方

- 行為者 actor … 合理的利益関心があり、それに従って行動
- $D=f(Ir)$  ※D:Decision making  
Ir:Interest

⇒ 意志決定は利益関心により決まるということ。

## (2) Interest

1. Actorにとって具体的に得になるもの。(経済的、心理的、社会的、…)
2. 「注意」「関心」(1. より抽象的。)  
Ex.「世界の平和のために」

## (3) 合理的 rational 理性に従って行動すること

- 理性 reason
  1. 哲学的 … 思慮や分別にもとづいて行動する能力。目標の設定に関わる。
  2. 科学的 … =目的合理性。実現したい目的に対し、もっとも適切な手段を見つけること。目標の設定そのものには関わらない。

## 112 歴史的源泉

## (1) 「人間」の合理性 … 人間は理性を持っているんだ、という考え方。近代以降。

## 1. 中世キリスト教

- 神は絶対者(絶対に過ちをおかさない存在)。
- 人間は神に導かれる存在。
- 人間にはほとんど理性なし。神に従う、頼る、という理性のみ。

## 2. 近代の人間観

- John Locke(1632~1704)  
人間は神よりは下。しかし神に頼らないで生きていける。過ちをおかした後、それを正すことのできる理性がある。

=自己決定的人間



自己責任の発生

(2) 利益 … 人間は自分にとって何が得かを考えて生きている、という考え方。ルネサンス以降。

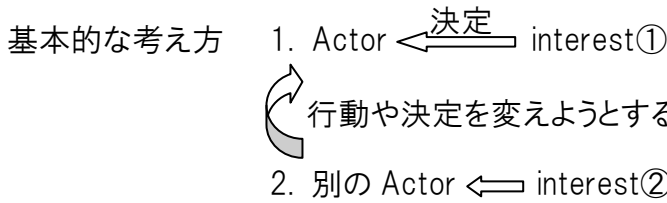
1. Machiavelli(1469~1527)

- 『君主論』
- 人間は恐れていたものより愛情を感じていたものを容赦なく傷つける。なぜなら、元来人は邪悪だから。恐れているものとは、処刑の恐怖で結ばれているから。
- 恩義で結ばれた愛情など、利害が絡めばすぐに断ち切られる。

2. J.Bentham(1748~1832) … 功利主義

- A) 幸福=快楽があり、苦しみが無いこと。絵画とか、そっちの方。
- B) 幸福の増大を目指して行動する。

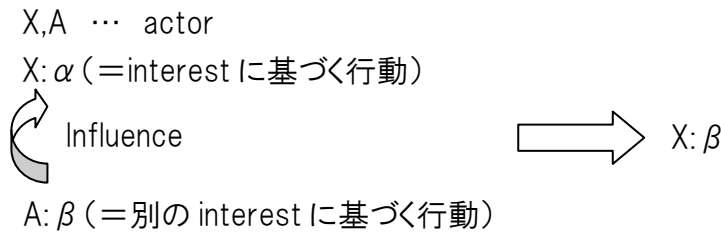
120 影響力 influence



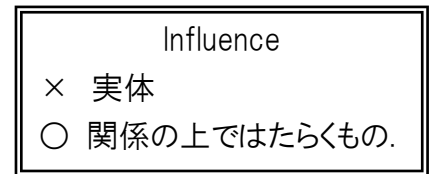
つまりは  $D=f(I_r, I_f)$  ※ $I_f$ :Influence

意志決定は利益関心と影響力によって決まるということ。

121 概念

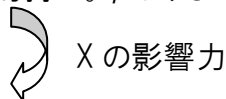


1. Influence の有無 … X と A の関係が左右。  
(→単に「力」とすることはできない。)



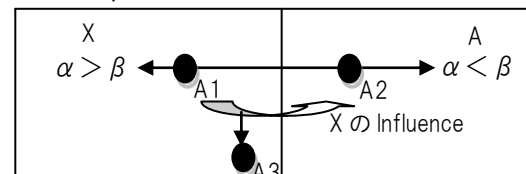
2. 次のような場合もある。

X:影響力を比較的持つ。βよりもαをしたい。右下図 A1。



行われる行為は、  
“βよりもα寄り”。下図 A3。

A:影響力を比較的持たない。αよりもβをしたい。  
右図 A2。



(1) 定義

1. XがAに対して影響力を持つ→度合・程度を考える。
2. 行動・意志決定に限らない＝感情・態度など、目に見えないものをかえても Influenceを持つといえる。

(2) 補助概念

1. 領域 domain … どの範囲の人々に対して影響力を持つか。
2. (範囲)scope … 見渡す範囲。人によって違う。他分野に応用も可。  
Ex.スポーツ界の実績という Scope を政治界に使う、  
などすりかえはよく行われる。
3. 政治資源 political resource … 影響力を行使するために利用できるもの。  
Ex.
  1. 物理的力(～したら殺すぞ)
  2. 金 (～してくれたら…円あげます)
  3. 愛情
  4. 誠実さ
4. 影響力の確実性 reliability
5. 影響力の強度 strength … 相手がどのぐらい嫌がっていることをやらせることができるか。

友人に  
某政治家が

○ノート貸して ×100万円貸して  
○罪被って

6. 影響力の費用 cost(→影響力は無限ではない。)  
Ex.
  - 一人、二人目までは罪を被らせても、三人目はばらしてしまうかもしれない。
  - 世間の評判が下がる。

122 広義の影響力

(1) 潜在的影響力=potential ←→ (ここまで述べてきたのは“顕在的 manifest”影響力)

↓  
現在政治資源を利用していない、影響力もない。  
しかし、使おうと思えば使える。

- Ex.会社の名誉会長
- 会社の株式を半分以上保持。
  - っていうか創業者。
  - だが普段は隠居。

↓  
お家騒動で株主総会に出現。

↓  
この時点で影響力は、“潜在”→“顕在”。



(2) 権力 power … 影響力を受けた人がそれに従わない場合、価値剥奪 deprivation を受ける。

Ex. 親分「覚せい剤だけには手を出すなよ。」

↓ 子分: 覚せい剤で儲ける。

親分: 影響力行使。「やんなったろーがよー」

↓

子分はハドソン湾に沈みます。

- 典型的な権力保持者は“国家”(もちろん会社の経営・管理も然り。)

(3) 強制 coercion … 影響力を受けた actor がそれに従おうが従うまいが deprivation を受ける。

Ex. 突然フルフェイスの兄ちゃんが凶器を持ってやってきた。

「金出せ。さもなくば殺すぞ。」

(4) 権威 authority … 影響力を受けた actor がそれに納得して従うような影響力。

Ex. ● 「この参考書を使った人は 90% 東大に入るらしい。実際に良さげだ。」

→ 納得して代金を支払う。

- 「いま病気で悩んでいるでしょう。～様に 1000 万円払えばガンは治りますよ。」

→ 納得して代金を支払う。

Authority が持っているもの = 正統性 Legitimacy

※ 絶対王政時代の血統に起源。

⇔ Legitimacy のある権力 = Authority ⇔ 政治権力は Legitimacy を持つべき。

正統性 or 正当性？

→ “正当性” はおすすしめない。

なぜなら、正統性が「正しい、正義である」とは限らないから。

## 123 歴史的源泉

※ いままで紹介したのは political science における影響力。

“伝統的な権力・事実としての権力” が先に存在した。

(1) (人間社会の始まりからみられた) 支配・服従の事実 … 昔からあった。

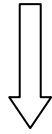
※ 事実として存在したから良い、とか今も存在して良い、とは言わない。

→ ただし現在でも、形を変えて存在するものである。

(2) 実体的権力観 … (おそらくルネサンスまでは)支配者・被支配者が存在することを、大多数の人は当然のこととして問題にしなかった。よって、その後生まれたものである。

- 力学 … 鉄砲の弾が飛ぶのは火薬の爆発の力。

権力にも、その基礎＝火薬に相当するものがあるはずだ。



いろいろな人が、いろんなことを言った。

1. 実力(軍事力)―マキャヴェリ
2. ウェーバーは大きく3つ

＝権威の三類型 { 血統  
法律(←現代日本)  
カリスマ charisma

カリスマ charisma

もともとは非常に高貴な語。

普通の人にはできない超人的なことができる人や、超人的能力を持った宗教的指導者を指していた。

3. 富(生産手段)―K.Marx「血統や能力の時代はもう終わった。」

※1・2は権力を具体的、実体的力と考えていた。

(状況の中で成立する影響力とは異なる考え方。)

(3) 機能的権力観(political science はこっちの考え方をとる。)

(2)の実体的権力は、誰に対しても同じ効果。

Ex.鉄砲の弾

(3)の機能的権力は、行使する者、される者の関係の中ではたらく。

Ex.「この印籠が目に入らぬか」@水戸黄門

→ ×印籠が特殊なビームを放つ。

○葵の紋というシンボルが効果を発揮。悪党が徳川幕府に従っている、という関係が前提。

⇒ 世の中が { 荒れている → 実体的権力が効果的。  
それほど荒れていない → 機能的権力で考えた方がよい。

※現代 … 特別なエライ人(将軍や水戸黄門など)が見えにくくなる。

↓ ポイントが追加される

機能主義＋大衆主義

＝普通の人も、それなりに人の行動を変える力がある、という考え方。

⇒ Influence

⇒ 「影響力の理論」の成り立ち方

124 批判(今まで説明してきた概念への。)

(1) 構造的権力観(マルクス寄り、マルキスト)

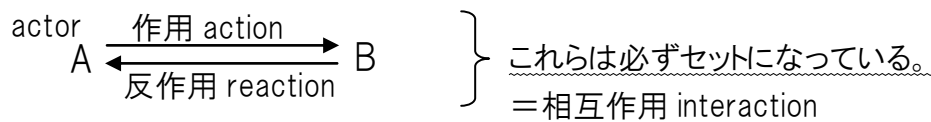
つい先ほどの influence(普通の人も、それなりに人の行動を変える力がある、という考え方)について…

- 政治体制や人権に関わる本当に重要な人の行動を変える力は、一握りの人間しか持っていない。
- 機能主義は(世の中はバランスがとれているという)均衡理論(現実を覆い隠すものでしかない)に陥っている。

Cf. C.W.ミルズ(マルキスト)「パワー・エリート」

- 権力を実体としてみるべき。
- 絶頂期の 1950 年代アメリカ
- アメリカが平等社会なんてウソ。  
一握りの人間(官、軍、産業界、…)が大多数の人間を支配・操作している。

(2) 相互作用論(社会学の中の少数派)



Ex.米大統領(強力な影響力を持つ)も、マスコミ、人々の生の声をとおして、自分のやったことの評判を聞く。

→次に活かす。

- 「interaction を考えなければ、完璧な機能主義とはいえない。」

## 200 政治的人間の理論

## 201 人間の考え方の展開

1. キリスト教 … 人間は神の似姿である。⇔神が自分に似せて人間を作った。  
→人間は神に近い。人間とそれ以外には厳然たる差。
2. J.ロック … 自己決定的人間  
=人間は過ちをおかすかもしれない。しかし、それを正すだけの理性がある。  
→人間とそれ以外には厳然たる差。
3. C.Darwin … 1859年 進化論 evolutionalism  
「人間と他の動物とは全く違う」という考え方は否定される。  
→種としての差はない。⇔ヒトは数ある動物のひとつ。

※ただし…

- ヒトは進化の最終、もっとも進化している、すなわち高等な動物と位置付けられた。
  - ヒトには理性がある→精神的差はあると考えられた。
4. S.フロイト … 「人々があまり目を向けなかった、人間の持つ非合理性に光を当てた」という点で評価される。
    - 人間も他の動物のように本能、衝動によって支配されている。

## 202 フロイトの人間観

(1) 心の構造 … 人間の心は3つの部分からできている。

1. イド(Id,It) … 一番奥深く、中心にある。

↓  
非常に奥深く、名をつけ難い。  
人の心の奥深くにある、一種の力、エネルギー。

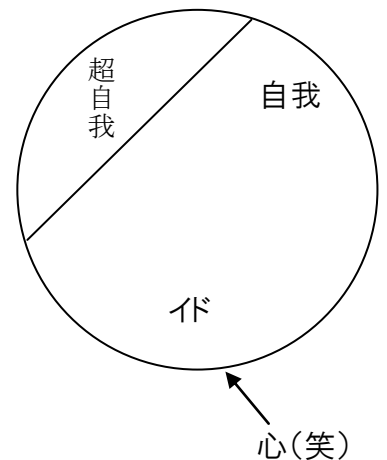
- {衝動} drive … 何か人間を駆り立てるもの
- {欲動}
- 本能 impulse … 心の中に脈打つもの

↓  
目指すもの：欲求の充足

- 欲求の中でフロイトが挙げた2つの基本衝動

◇ Eros … 生きることを求める衝動、子孫を残す欲求、  
自己保存の欲求、性の、生の欲求。

◇ 死の本能 … 自分を破滅させる、物を壊す、自分の世界をすべて壊したい。  
※「死の本能」の評判は今ではよろしくない。



⇒ イドが周りにそのまま発揮されると、社会生活が送れない。

2. 自我(ego:self) … イドの中で外の世界と接触する部分が発達。  
イドから発せられる衝動をコントロールして外界に働きかける。

※2種類ある。

- 意識的機能  
Ex.腹減った→食べ物を手に取る→腐ってるっぽい→食べない  
(学習、記憶、経験が関わることもある。)
- 無意識的機能—自我を守る
  - I. 欲求が充足されないと自我が非常に傷つくから。
  - II. 超自我からの命令を守れないと自我が傷つくから。

### 3. 超自我 superego

- もとは自我の一部。自我から分かれた。
- 社会の倫理的基準が内面化したもの。  
自分自身でも「そのとおりだ」と思うこと。

2つの機能がある

1. 批判的機能 … 罪悪感、良心の呵責、自我を批判  
Ex.「試験前にPSPをやっているのかお前。」
2. 自我理想(理想我) … 「~のようになりたい」という理想的自分を設定。  
→様々な衝動から自我を守る。  
理想の方向へ自我を導く。

※命令という形で自我に働きかける。

自我がそれに… 従う → 自我が傷つかない  
従えない → 自我が傷つく(無意識であっても傷ついている)

### (2) 心の働き

conscious ————— 前意識 subconscious(努力して集中すれば意識できる)  
unconscious  
(↑がんばっても意識できない。ここを探るのがフロイトの精神分析学。)  
Ex.連想法、夢判断、…

### (3) 重要概念

1. 外傷 trauma … 心に大きな傷を与えるような経験。  
→個人として処理できない。  
→押さえつけられて、無意識の中へ押し込まれる。  
=当人は意識できない  
Ex.小さいころ、スーパーでチョコを勝手に食べて、ひどく怒られた。



甘いものは好きなのに、なぜかチョコだけは嫌いだ…

## 2. 防衛機構 defense mechanism

- 自我は傷つきやすい。
- 傷つく→無意識に防衛機構がはたらく(意識していればそれは“言い訳”。)
  - a. 抑圧 repression … 衝動を意識しないようにする。
  - b. 置き換え displacement … 抑圧された感情が本来の欲求を離れて別の対象にうつされる。

Ex. ぶられる → 「目指せ、文一突破」  
→ ろっぽんぎであそびほうける

- c. 反動形成 reaction formation … 無意識の衝動を自我が認めることのできる正反対の衝動にかえる。

Ex. Aさん → (いろいろ教えてくれる先輩の) Xさん  
本音: 疎ましい

いろいろお世話になっているが故に、  
「疎ましい」という感情を認められない。

↓ 反動形成

「すごく尊敬している」

- d. 隔離 isolation … 自我がものすごく傷つく  
→ そのまま覚えておくと傷ついたまま  
→ 傷ついた記憶・経験から自分・辛い感情を引き離す。
- e. 同一視 identification  
Ex. 奴隷のような状態「大先生のために有罪になります」  
→ 自我が傷つく「あんなヤツのために自分がこんな目にあうのか…」  
→ 支配する者と自分を同一視(ただし無意識に)  
「これは自分のためでもあるんだ」
- f. 合理化 rationalization … 自分のやったことを正当化する。  
そのために、もっともらしい or 社会的に認められる理由を作って、本当の理由のかわりにする。

= すっぱいぶどうの論理(イソップ物語)

### すっぱいぶどうの論理

ある晴れた日、くいしんぼうのきつねさんが歩いていると、木の上にぶどうがなっていました。手を伸ばしても届きません。どうやっても届きません。きつねさんは去り際に捨て台詞を吐きました。「あのぶどうは、すっぱいに決まっているさ」

※本当の理由: 手(or 足)が届かない  
→ これを認めてしまうと自我が傷つく

210 政治人 politician の理論—フロイトの理論を応用

(1) H.D.Lasswell

(2) 政治人の理論と人間行動

- $B=f(O)$  B: 行動 behavior  
オー O: 生活体(生命体)organism  
人間、動物含めて、複雑な行動をするもの。
- Bはその人のOの特性(本能、無意識)によって支配されている。  
(非合理的人間観を政治学に初めて持ち込んだ理論。)

211 政治人の概念

(1) ラスウェルの考え方

1. 政治制度及び政治機能 … 具体的「政治」でなくとも、左のようなものはあると考えた。
  - 「制度及び機能において政治的」とは？  
Ex.「家族が力を合わせて何かがんばる」これもまた政治的。
2. 政治人 … 人間行動の一側面。  
政治的機能をはたす、という人間の一側面を抽象化したもの。



なぜこう考えたか？

(2) ラスウェルの社会観

1. 定義 … 社会において人間は資源 resource にもとづき  
制度 institution を通じて  
価値 value を追求する。

資源 resource:最終的価値を手に入れるための手段。  
価値 value:自分が欲しい、価値があると思うもの。

- 制度 institution はラスウェルによれば…
  - 定型化された行動の様式。
  - ×組織 organization・規則 rule
  - Ex.「知識を得たい」
    - 4c、大和 →どうしよう(笑)
    - ※制度が無い。いくら resource をかけても目的に辿り着けるかわからない。
    - 8c →命がけて唐へ行く(遣唐使)
    - 18c、江戸下町 →寺子屋

このように、世の中で、ある価値を手に入れるために行動が定型化されてくる場合がある。  
上の例では、制度は遣唐使と寺子屋。定型化された行動をとることで、目的に辿り着く。

## 2. 説明—ラスウェルは、価値には対応する制度があると考えた。

制度	価値
ビジネス	富
専門技術職(Ex. 専門学校、弟子入り、…)	技能
病院	健康
家庭	愛情
政治	権力 power(人を支配する力)

## 212 政治人の定式化

- ラスウェルは政治人を「人間の類型」と定義。
- 「その人のどういう側面が最も目立っているか」や「その人が何を一番頑張っているか」(←人間は価値に序列をつけられるから。逆に序列をつけられなければ非合理的。)によって、類型に分類できる。

類型としての政治人



(1) 「政治人」という類型 = 他のあらゆる価値よりも権力を重視する類型。

- ラスウェル「価値は人により千差万別である。他のものを差し置いて権力を求める者には、やはり何かあるのだろう。」

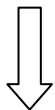
(2)  $P(\text{Political man}) = p\}d\}r$  ※ } = 変換記号(笑)

1. p: 個人的動機 private motives  
社会に関わる、ということではない。

- ラスウェル「幼少期の家庭環境が決める。」  
Ex. エディプス・コンプレックス = 男の子は母親をめぐって父親と敵対関係にある。  
※コンプレックス = 相反する複数の感情が入りまじったもの。



これだけじゃ世の中通じない。



変換して…

2. d: 置き換え displacement (防衛機構。このためにフロイトを説明したんだってさ orz)

- (個人的利益は置き換えられて…)  
公共の利益 public interest (でなければならない。)

3. =r: 合理化 rationalization



213 類型学(政治人にもいくつかの類型がある。)

(1)

性格型	政治的タイプ
強迫型	官僚
劇化型	扇動家
冷徹型	外交官・仲裁者

対応

(2) 説明

- ラスウェルは類型をつくるために裁判官を調べた。  
なぜなら、裁判官は政治家と違って安定している(失職しないという点で)し、アメリカでは裁判官は選挙性が強かったから。
- まず家庭環境・日常の行動を調べ、性格型をつくり、政治的タイプに当てはめた。

1. 強迫型

- 裕福な家庭、社会的地位は高かった。父が厳格、冷淡。  
母が気取って堅苦しかった→母親とはうちとけなかった。  
↓
- 子どものころから親の愛情・称賛に飢える。  
↓
- 強迫的性格に。  
(物事、人間関係を画一的に処理。細かいことにこだわり、温かみがない。  
すべて規則に従って処理し、融通が利かない。  
自分の権限が他人に侵されるのを嫌う。)  
Ex.「あなたとは違うんです。」のFさん。

2. 劇化型

- 家庭では波乱が渦巻いていた。母親は中流階級の出で、婚期を逃して焦って結婚した。父親はブルーカラーで品がなく、育ちが悪かった。  
母「坊や、あなたはお父さんみたいになっちゃだめよ。がんばって勉強して東大に入るのよ」→父とけんか。(この例え要るのか…)  
↓
- これはこれで子には生きづらい。  
↓
- 子どもは人の感情の動きを読むのが上手くなる。人に気に入られるにはどうしたいか考えるのが上手くなる。(コメディアン、俳優にも向いている。)
- 自己顕示欲強い。視野が広い。多様性、新しさを好む。新しさへの順応も早い。  
Ex.「感動した！」のKさん。(日本の政治史でも珍しいくらいの劇化型。)  
舛添。

### 3. 冷徹型

- データ不足。
- 家庭環境:なし
- 怒り、悲しみ等がない。常に冷静。
- 外交官、仲裁者  
Ex.タレーラン、谷垣

## 214 批判

(1) 歴史的制約=19c~20c前半を対象としている。

あらゆる価値を差し置いて無限に権力を追求する人間、あたり構わず権力をふるう人間=power seeker ともよべる印象的政治人が、ラスウェルが考えた 20c中ごろには存在した。

Ex.ヒトラー、ムッソリーニ、スターリン



しかし 21cになって目立たなくなった。(存在しなくはないが。)

特に先進諸国では、ヒトラー、スターリンレベルの人物は出てきにくい。



こんなことを考えるより、democracy 中での leadership を考えた方がよいだろう。

(2) Elite 主義

歴史の中で、権力者のみに注目した。



しかし、政治学自体が一般の人々へと目をうつしていった。



一般人に対して power seeker なんてものをだしても…  
=対象の制約(権力の追求ができるのなんか一握り。)

※心理学の導入は評価できる。

(3) フロイト的人間観 … 心理学全体からみると特殊。

幼少期の家庭環境

→意識していない organism としての特徴=personality と捉えた。



が、そこに執着しすぎた。確かに、personality も大切だが、学習したり人の意見を聞くことによって、バランスのよい判断をすることも可能である。



ラスウェルの利用した心理学はあまりに人間を単純化しすぎている。

Cf.河田・荒木『ハンドブック政治心理学』北樹出版、2000年

300 政治集団への理論

301 まず(一般的に)社会学的に考えて集団とは

×集まってりゃなんでもいい。Ex.センター街にいる人々は集団とはいわない。

○いくつか条件がある↓

1. 共通の目標や関心がなければならない。  
Ex.743 教室のみなさん。
2. 地位 status、役割 role が分かれている。  
※status…集団の中での立ち位置、ポジション。  
Ex.学生という地位、教師という地位  
role…役割の逸脱に対しては(規範 norm による)制裁が加えられる。  
Ex.高橋は教える、生徒は教わる、という役割。
3. 一体感 we consciousness

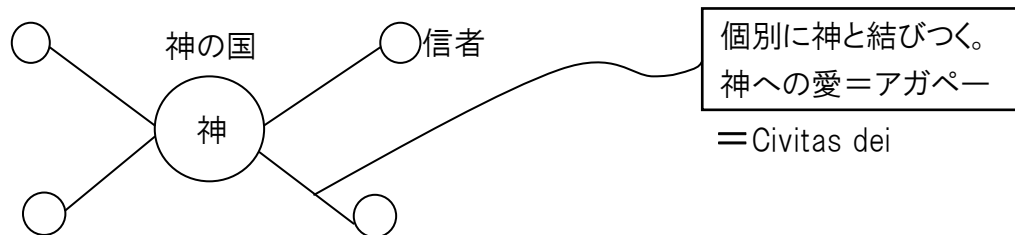
302 集団の考え方の歴史

(1) ギリシャ・ローマ時代

- 個人個人はばらばら。
- あとは社会がひとつあるだけ。  
※社会を分ける「部分」という理論はない。  
(奴隷、貴族といった区別はあったが…)

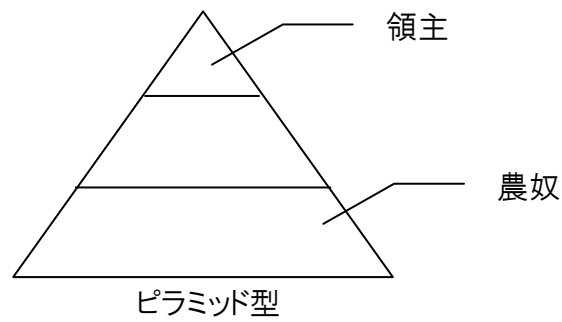
(2) 中世

- a. キリスト教 … 神の国 civitas dei が理想。  
※civitas: 人々が深いつながりで結ばれていること。  
dei: 神の



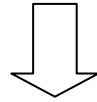
信者間での「あっちの部分」「こっちの部分」という理論にはならない。

b. 封建制



- 考えられた説明:有機体のアナロジー  
=社会全体が動物や植物の体と同じなんだ。  
全部そろってはじめて意味を持つ。  
Ex.根、茎、花、…(根がなければ花もない。)  
農奴 領主
- 有機体的社会観=差別や格差を前提とした上での相互依存。
- 実際にはギルド(これは現実の集団といえる)等が発達するが、まだ理論化されず。

(3) 近代前半 … 絶対君主→人々のもつ基本的権利まで浸食。



(人々の権利を守るための)自然法というフィクション(理論)

(前回の(3)の続き)アルトジウス(1557~1638)の政治理論

近代前半: 国家として宗教を決める → 分かれる → 正統・正教・orthodoxy  
異端・異教

異端弾圧

心の中の問題を理由として命が奪われる。  
(領地ごとに決めていたときはそこを逃げだせばよかった。)

少数民族の権利擁護。

一番最初のものであったのは擬制 fiction

(fiction ではあるけれども、人々は生まれながらにして~の権利を持っている。)

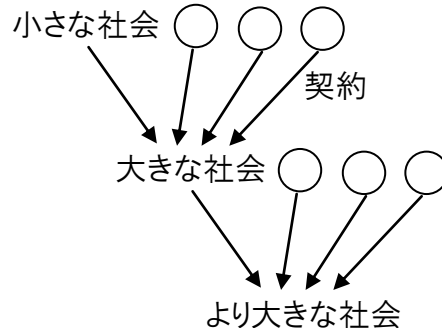
自然法

この圧迫を最も強く受けたのがスペイン支配下のフランドル地方。  
その地で新たな考えが生まれる。

a. [社会]社会契約説(アルトジウスの社会観)

※一般に耳にする社会契約論(ホッブズ、ルソー、…)は近代後半以降。

- アルトジウスのはちょっと古い。契約の単位は個人ではなく社会。



- 家族 → 任意集団 → 地域共同体

→ Civitas (共同体。人と人との集まり。コミュニティに近い。)

(←→ state は権力組織。人が人を支配。マキャヴェリが考えていた方。)

b. 国家も一つの社会集団にすぎない

(国というのは、それを構成している社会集団が集まってできている。

→特別な社会集団ではない。それを構成している社会集団と同じ性質を持つ。)

↓  
多元的国家論 pluralism

(democracy が内側から発達した国々に受け継がれた。)

State という概念が希薄。国とは人々が下から作り上げたものという意識を持つ。Ex.イギリス、アメリカ

↓  
市民社会論として展開。(国家論はマキャヴェリとかの方に近い。)

市民社会論

- 一番強いのはドイツ。  
(ドイツや戦前の日本など、近代化に遅れた国々で盛ん。)
- イギリス、アメリカではあまり使われない。  
(上から押さえつける、という概念があまりない。)

Ex.オランダ … スペインの植民地。カトリックが外からやってきて支配したが、  
独立した際は、オランダやベルギーなど商業都市が集まってできた国だった。  
※オランダは絶対主義的考え方も強かったので当てはまらない、という見方もある。

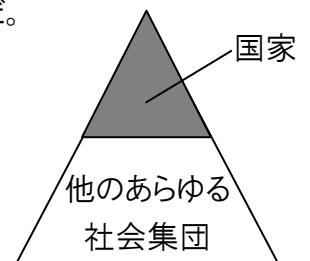
c. 多元的国家論

(ア) 理論

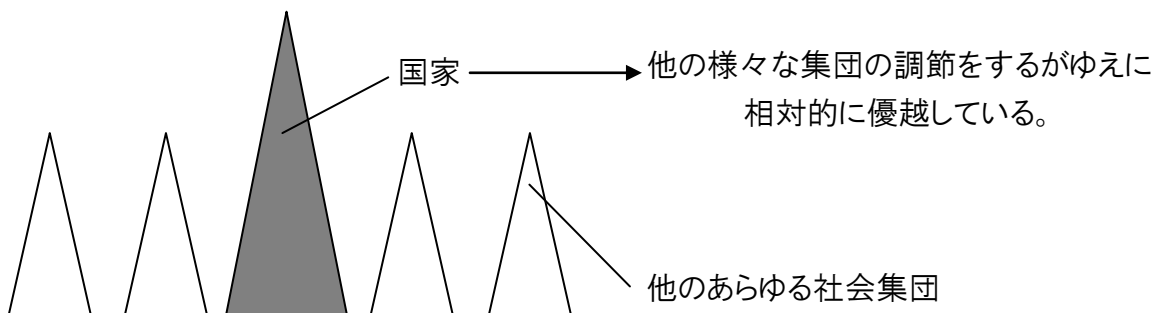
- 政治理論の上で、国家というものを特別な位置から引きずりおろした。
- 国家権力が強い国(Ex.中国)ではイデオロギーとして大きな価値を持つ。

① 伝統的国家論 … 国家は他の社会集団とは異なるものだ。  
(遅れて近代化した国々で根強い。)

- 加入、脱退の自由がない。
- (人の生命、財産を奪うほどの)特別な権力がある。
- 永久的である。



② 多元的国家論 … 国家は特別ではない。他の社会集団と並存。



(4) 近代後半 … 本当の意味で「絶対主義」というものが出てくる。

→これを支える理論も出てくる。

1. 絶対主義の政治理論

ジャン・ボダン(1530~1596) … 「主権論」をはじめて唱えた。

- 主権＝他のあらゆる権利を超越する絶対的権力。
- 主権は国家にある＝「国家主権」を唱えた。
- (絶対主義がまだ確立していない時代だったから)次の時代の理論を作ったといえる。

国王が封建制において戦わなければならなかった「余計なもの」

＝封建制(領主裁判権、荘園の特権、…)

↓しかし

近代化のためには国を統一しなければならない。

↓

領主たちがもつ様々な権利を超越する主権を唱えた。

↓

主権はすぐ膨らんで大きくなってしまう。(＝近代国家)

2. 近代政治イデオロギー

- ボダンが攻撃した「古臭いもの(＝封建制)」は攻撃＝国家を擁護。
- 一方で、個人も守らねばならない。  
Ex.ホッブズ、ロック、ルソー

(1)～(4)とみてくると、社会全体(人によっては国家)と個人の真ん中＝集団を扱った理論がない。

↓

(5) “真ん中の”集団の理論がなかった理由

1. 政治は権力を握った個人が動かすもの。大多数の個人は政治を変えることはできない。  
Ex.マキャヴェリや絶対主義は「君主」の存在を望んだ。
2. 個人は政治を動かす力を平等に持っている。  
(ただし、ギリシア・ローマにおける奴隷は入らない。)

↓

ひとりひとりが正しければその人間の集まりも正しい選択をなす。

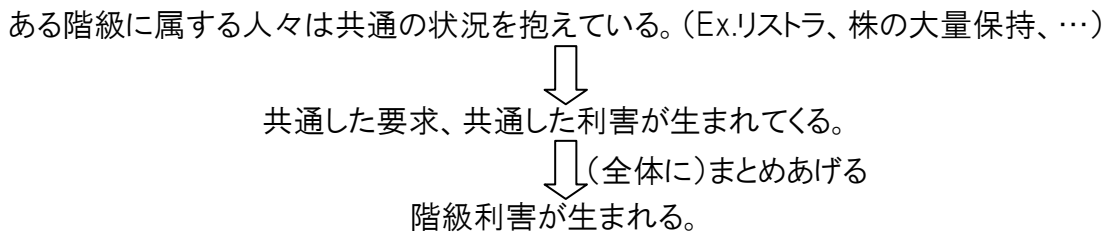
↓

「集団」を考える必要はない。

ところで、社会の下のラインはこれまであまり考えられてこなかったが、それを大幅に取り入れたのがマルクス。  
ヨーロッパが長期・大規模戦争をしていたときにマルクスが作った理論

303 マルクス主義による集団(=階級 class)の理論

- (1) 階級分裂 … 支配する階級と、される階級の二つに分裂している。
  - (2) 階級利害 class interest … 二つの階級の利害は究極的に反している、対立している。  
(たとえどんなに調整を試みたとしても。)  
人々は階級利害を意識しているわけではなく、気づいていないので、労働者は扇動性 agitation のある政治家に騙されたりする。
- ※ある階級に属するからといって自動的にその利害が決まるというわけではない。  
そんな抽象的なものではない。



- (3) 階級意識 class consciousness
- (2)階級利害を理性的(×感情的)に認識→階級意識が生まれる。
  - 「理性的に認識」であるから、勉強が必要である。
  - 階級意識=同じ階級に所属している、という連帯感。  
(同じ状況におかれている、同じ要求を持っている、…)
  - 自らの階級がもつ歴史的・社会的使命の認識。  
Ex.プロレタリアートは最も虐げられている。  
→自らを解放し、権力を握ろう。  
→他の階級も解放しよう。

↓

マルクス主義による集団の理論

$$G=f(lr,Cs)$$

=「ある集団が階級であるとは、彼らが共通の利害を持ち、それらを理性的に認識している、ということである。」

※G:group 集団→階級 class  
lr:interest  
Cs:consciousness



補01 liberalについて … 政治に関する言葉としては、時代によって使い方が変わる。

1. 18c 後～19c … liberal 生まれる＝自由主義。

- 当時の社会は締め付けが厳しく、それを緩めようとした。
- 宗教に対して反対した。

Ex.すべての教育は宗教が握っていた。みんな宗教の学校に行っていた。



教育の自由化＝公教育を宗教から切り離せ

(宗教の教育を受けたい者はいいが、そうでない者に対しては、  
公教育から宗教を廃止しろ。)

Cf.フランス:公教育の場においてブルカを禁止。

↑自由主義者がかつて、公教育からカトリックを追い出すのに苦労した、  
という歴史的背景

- 身分制も残っていたので、その打破を狙った。  
＝一部の人の特権を持ち、行使するようでは社会は良くならない。

しかし、彼らの考え方を 100m走に例えると…

「恵まれない人は 100m以上、恵まれている人は 100 以内を走る、という状態になっているので、  
全員の走る距離を 100mに統一して、平等な競争にしましょう。」というもの。(＝古典的 liberalism)

2. 20c … 古典的 liberalism で随分世の中風通しがよくなったが、問題はまだある。

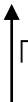


福祉国家を目指す

Ex.累進課税

財の移転(富める者→貧しい者)

財の地域間移転(富める地域→貧しい地域)



「こういう福祉サービスは行き過ぎだ。」(主に英、米)

3. 20c 末 … 政府が様々な規制をかけるのはよくない。市場に任せるべき。

Ex.毒入り餃子を誰かが売ったって、どうせみんな買わなくなるから良いだろう。

＝neo liberal 新自由主義者(市場経済に任せる。anti-welfare。)

※19c 末～20c、イギリスで new liberalism というものがあって紛らわしいから、

高橋氏は新自由主義者という訳語が嫌いである。(neo～と new～は中身も正反対。)

ちなみに new liberalism は第一次世界大戦後 socialist となった。

さらに現在日本は基本的に neo liberal である。

(ようやく 310 集合的選択 collective choice の理論の本題)—K.J.Arrow と M.Dison  
 人々は人に迷惑をかけない限り、各々自由に好きな選択を勝手にできると考える。  
 →その選択を集めてきたときにどうなるか、という話。

## 311 歴史的源泉

1. 近代の人間観 … J.ロックの自己決定的人間(前述)
2. J.Bentham(1748~1832) … 功利主義
  - ロックの人間観のうえに作られた。
  - 物事はすべて利用するもので、利用する価値=功利があればいい。  
 →我々の社会も、構成員である我々一人一人が利用するときに便利であればいい。
  - a. 幸福 … 快楽があり、苦しみがなくこと。(一人間はそれを求めている。)
    - 一般的な快楽(空調、もっと座りやすい 743 の椅子、…)から、
    - 芸術への感動、哲学による自己啓発などの高尚なものも含む。
  - b. 人間の行動 … 人間は自分の幸福が増えるよう行動する。
  - c. じゃあ、我々の社会はどうすればよいのか。  
 →定義に困る。「人に迷惑をか…を勝手にできる」ので、人それぞれ幸福は違う。)



「最も多くの人々が最も幸福である」状態が一番良い社会。



最大多数の最大幸福 Greatest happiness of the greatest number

この考え方では… × Aさんの幸福を増やすと Bさんの幸福がそれ以上に減る。

○ Cさんの幸福を減らすと A、Bさんの幸福がそれ以上に増える。



こういう調整を繰り返す。

総和が max になった状態が最も良い社会。

3. J.S.Mill(1808~1873)
  - 1.近代の人間観、2.J.Bentham を受け継ぎつつ、なおかつどうすればよいか考えた。
  - 古典的 liberalism の代表的人物  
 複数の人々が「人に迷惑をか…を勝手にできる」場合はよいが、(Ex.飲み物)  
 否が応でもみんな一つを選択をしなければならないとき、  
 みんなが自分勝手な選択をしながらどう妥当な選択をするか。  
 (→多数決の原理へ。)  
 Ex.高速道路
    - ◇ ある人はすべて無料化を主張。
    - ◇ ある人は一部無料化を主張。(混んだら嫌だし。)
    - ◇ ある人は無料どころか値上げを主張。(車持ってない→そこに税金使うな。)



さあ、どうする？

① 人間の意志というものは基本的にその個人の利益によって決まる。  
しかし、大きな集団の中で、ごく少数の人は個人的利益を超えた発想をして、  
全体のことを考えて意見を言う。

② 人間の利己心による決定は常にばらばらであって、一致することはない。

Ex.あるばかな国

本州と四国のあいだにいつぺんに橋を三本架けました。

しかし、全体の利益を考える人は少数であるが、一致している。

→まずすべての人が討論に参加。



正しい決定とは何かはその討論の中で教育 propaganda(by ミル)される。



多数決をとる。



個人の自由は侵されていない、寛容されている。

なおかつ、全体の利益を考える正しい社会が作れる。

propaganda 20c以降は「思想戦略」となったが、 19c末には「教育」の意味で使った。
--

※我々の democracy はこのようにじっくり議論する、ということを欠いている。

→ミルの考えを見直そうという議論も最近出てきている。

=deliberative democracy (deliberate:じっくり考える)、熟慮民主主義、  
討論民主主義

特に、インターネットを使うものを、e-democracy

では、それは本当に可能なのか？

そのまえに、まとめ

312 基本的な考え方(個人は自由な選択をできる、という前提にたって…)

$$G=f(l_d)$$

$$= \sum l_d$$

=「一人一人の個人を尊重した総和」

※G:集団 group

l<sub>d</sub>:個人 individual

313 K.J.Arrow — 一般不可能性定理

Cf.アロー『社会的選択と個人的評価』(日本経済新聞社、1977)

佐伯胖『きめ方の論理』(東大出版会、1980)

(1) 数理経済学

我々個人はいくつかの選択肢 alternative のうちから任意の二つ(最初から多いと混乱するから)に対して、選好 preference、無関心 indifference のいずれかを決められる。

Ex.

- A … 個人
  - a,b,c … 選択肢
- $a > b$  または  $b > a$  という選好 preference をいうことができる。

しかし、「どっちでもいい」場合もある。

→「どっちでもいい」という選択も認めないと、

個人の選択は守られない。

→「どっちでもいい」という選択

= 無関心 indifference

=  $a \sim b$  と表す。

( $a \sim b$  という選択が決まってしまうと、集合的選択が容易になる。)

たとえば「三人で同じもの(旅行先など)を決める」場合で

Aさん …  $a > b > c$

Bさん …  $a > c > b$  となった。

Cさん …  $b > c > a$

⇒ さあ、どうするか。

と、その前に、アローの前には複数の議論があった。

選挙(集合的選択の典型例)のときにみる議論である。

(2) アロー以前の理論 … これが問題になり始めたのは、

フランス革命(「一人一人の人間は平等だ」と主張された)のとき。

1. Condorcet (フランス革命のころ活躍。)

選択肢が3つあるとき、3ついっぺんは混乱するから2つずつにして、三回やればいい。

まず2つの選択肢を取り出す → 勝ち負けを決める。

Ex. a と b → a が勝つ (a は Condorcet 式の winner)

残った a と c → a が勝つ

b と c → b が勝つ

⇒ Condorcet 式の集合体の結論 =  $a > b > c$

※ C さんはどうしても a が嫌だとしても、その思いの強度は考慮されない

→ 度合、選択の強さを考えていない、という問題がある。


Condorcet = 単純多数制

このシステムを選挙に用いるのは英、米、カナダなどに限られる。

日本は比例代表制などを用いて Condorcet 式よりは細かく分けている。

注意

ここでは preference を表す記号として「 $>$ 」を使ったが、高橋氏が板書したのはこんな感じの記号 ↓



家の Word では出なかった(笑)  
ちなみに「変換記号」はコレ → 「}」。  
紛らわしいので間違わないように。  
文句を俺に言わないように。

2. <sup>ボルダ</sup> Borda … 選択順位に対して点数を与える。(比例代表制はこっちである。)

Aさん …  $a > b > c$

Bさん …  $a > c > b$  となった。(さっきの Condorcet の時と同じ。)

Cさん …  $b > c > a$

Borda 式では、一位…○点、二位…×点、…と選択順位に対して点数を与え、最後に合計し  $a$ …△点、 $b$ …□点、…というように計算する。

→高橋氏「与える点数によっては Condorcet のやつと結果が変わるかもしれません。」

…この場合はどう足掻いても変わりません(笑)

ただし、これでも各人の「思いの強さ」は反映されない。



3. 持ち点方式(今では一般的。)

Ex. 日本レコード大賞、日本カー・オブ・ザ・イヤー

→各人の得点の配分の仕方によっては、今度こそ本当に  $b > a > c$  なんてことにもなりうる。

ところで、Aさん、Bさん、Cさんがみんな同じ持ち点でいいのか、という問題がある。  
たとえばもし、Bさんが激しく旅行ツウな人だったら…？

さらにまだ問題がある。

Condorcet 流でも Borda 流でも持ち点方式でも困る、という場合がある。

=投票者のパラドックス voter's paradox

Ex.  $a > b$ 、 $b > c$ 、 $c > a$  だったとする。

Condorcet 流、Borda 流 … 同順位

持ち点方式 … 順位は出るかもだけどその結果は怪しい。

(3) アローの6条律 … voter's paradox に陥ったら、その集団は決定不能だ、という議論。

1. 連結律 connectivity … どの2つの選択肢も比較することができる

=比較可能の条件。

Ex.  $\begin{cases} x > y \\ y > x \\ x \sim y \end{cases}$  このどれかを選ぶことができる。

2. 推移律 transitivity … 循環順序の選択をしない=個人は合理的である、という条件。

( $x > y > z > x > y > \dots$ )

Ex. すべての選択肢  $x$ 、 $y$ 、 $z$  について

$\begin{cases} x > y \\ y > z \end{cases}$  ならば  $\xrightarrow{\text{必然的に}} x > z$  (こうでないと非論理的。)

3. 領域無制限性 unlimited domain … 個人は与えられた選択肢の中で、  
どの順序の選択をしてもよい。

Ex. 9999 人が  $x > y > z$  という選択をして

A さんだけが  $z > y > x$  という選択をしたとしても、

A さんをいじめてはいけない。A さんの選択を変えさせてはいけない

なぜなら、与えられた選択肢の中で合理的に順序を示すのは個人の自由だから。

(=自由主義の原則)

4. パレート最適 pareto optimum … 集合的選択は、その集団を構成する個人の選択を  
可能な限り尊重すべきだ。

Ex. 9999 人  $x \sim y$

2 人  $x > y$

⇒  $x > y$  (多数決ではこうはならない。)

=democracy の条件

5. 無関係対象からの独立性 … たくさんある選択肢のうちから任意の少数をとりだしても  
順位は変わらない。

⇒ 物事は、少しずつ取り出して、

分析的に考えることができるんだ、ということ。

Ex.ある集団が  $x > a > y > b$  という選択をしたとして、

↓ 選択肢を  $x$  と  $y$  に限定  
 $x > y$

6. 非独裁制 … どの一人の選好も他の人の選好に優先されてはならない。

1.~6.のどの条件も大切に、満たされねばならない。

ちなみに 1.2.5.は論理性の問題。(これらは明らかなのでいいだろう。)

3.4.6.は liberalism or democracy の条件。

ここで、下のような voter's paradox が起こったとする

$$\begin{cases} A \text{ さん} \cdots a > b > c \\ B \text{ さん} \cdots b > c > a \\ C \text{ さん} \cdots c > a > b \end{cases}$$

このままではどうにもならないから、強引にどれかに決めようとする。

→4.パレート最適に反する。

→なら、選択肢を減らせばよい。そうすればわかりやすくなるだろう。

→3.領域無制限性に反する。

→ならば誰かが強制的に他の人の選択を変えさせればよい。

→6.非独裁制に反する。

⇒ voter's paradox に陥ったら、上記6条律を同時に満たすことはできない。(by アロー)

=一般不可能性定理

(基本的に voter's paradox は解けない。

なので、どれか(たとえば 4.パレート最適)を緩めよう、という議論も出る。)

(4) 一般不可能性定理

でも、voter's paradox なんてそんなに起きないんじゃないか、と思う人もいる。

↓そこで…

(5) 投票者のパラドックス voter's paradox—実例

1. まず背景

- USA—上院と下院の二院制  
二院制では通常下院の方が強いのが普通(Ex.衆議院)だが、アメリカでは人口に比例して集める下院よりも連邦隔週から2名ずつ集める上院の方がステータスが高い。
- 内戦(日本で南北戦争と呼ぶもの)によって南部が敗北し、勝った北部の共和党が多数派になった。
- しかし失業者が増え、多くの人が飢え、苦しんだ世界恐慌(1929年)をきっかけに共和党ではなく民主党が多数派になった。  
＝政治配置の転換(F.ルーズヴェルトによる)
- ルーズヴェルトがやったことは次のとおり。  
民主党の南部はの中心は南部の大農園主だったが、北部の工業労働者(もとは移民。内戦の時はまだ国内にいなかった)を引きこんだ。  
＝ルーズヴェルト・コアリション→民主が多数派に。
- ちなみにルーズヴェルト・コアリションの効果はまだ多少活きている。  
Ex.民主党が大統領を選ぶとき、北部派と南部派を組み合わせる。
- つまりは、民主党は歴史的には2つの部分から構成されているということ。

2. では本題。

- USA、1955年。このときすでに多数派は民主党。
- 登場人物:L.B.Jhonson—上院院内幹事。多数派の幹事であるから一番強い。  
ちなみに彼は議会の達人である。
- このときの上院は下のような状況だった。

{	多数派民主党	北部	…1/3(三分の一)
	L.B.Jhonson が代表する南部		…1/3
	少数派共和党		…1/3
- 問題となった法案: 国道建設計画案  
(正確には Inter State という。もちろん無料。)
- 建設の目的: 第二次世界大戦後の復興の手段とする。加えて、インフラ整備や、それによる需要の喚起(建設会社も労働者も潤う)。
- 民主党が法案を提出するにあたって、デーヴィス・ベーコン挿入句(以下 DBS(笑))が付け加える。  
DBS=「建設に動員される労働者の賃金を全国一律にする。」

- 北部 … 工業発達
- 中西部 … 金、石油が採れる
- 南部 … ずっと停滞
- DBS では一番賃金の高い北部の水準で決める。
- つまり賃金高い。
- 南部の労働者に有利。
- 南部の人々の生活水準を上昇させよう。

選択肢が3つに

- ① 原案(以下 G) … DBS あり
- ② 修正案(以下 S) … DBS なし(南部派)  
南部農園主の利益を考えた。賃金が上がったなら農園主は困ってしまう。
- ③ 廃案(以下 H) … もちろんこれは共和党。  
「そんなん建設する必要なし。そんなインフラ事業は民間の動きに任せる。」

民主党北部派、民主党南部派、共和党(どれも人数は全体の1/3)が次のような選択をした。

- 北部 … G>S>H 「G がダメなら、せめて国道は作った方がいい。」
- 南部 … S>H>G 「S がダメなら、むしろ廃案がいい。G は最悪。」
- 共和党 … H>G>S 「明らかに南部の人々の状況はひどいから、H がだめなら G がいい。」

⇒ 投票者のパラドックス voter's paradox

そこで L.B.Jhonson はまず G をどうするか考えた。

→まず2択にしてみた … G or S/H



S/Hに決定。(これは人数の配分を考えれば結果は明らかだった。)

→次の2択をやってみる … S or H



Sに決定。(3グループの選択の仕方を見ればこれも明らかだった。)

このように voter's paradox が存在するときは、議事の手続きによって、どんな結果も出うる。  
= 経路依存性 path-dependency

経路依存性 path-dependency  
左のような意味ともう一つ、  
「過去にしたことと同じことを、特に問題がなければ繰り返したがる」という意味もある。  
Ex.なんとなく自民に投票(ちょっと前に話題に。)

議会の達人である L.B.Jhonson は上のことを直感で見抜いて、自分が代表する南部のいいように議事を進めたのであった。  
(後から研究者が研究して、  
「L.B.Jhonson はズルかった」となった。)



314 集合財 collective goods—M.Olson

M.Olsonは常識を覆す理論をいろいろ研究した。

Ex.ある常識「人間は賢明で、理性的であって、文明を発達させてきた。」

(Ex.鉄道建設、高速道路建設、環境も良くしようとする、…)

↑ 対抗

Olson「鉄道も、高速道路もない。環境も悪くなるばかり。」

Olsonはそんなやつ。

(1) 集合財

- 財＝人間の欲望を満足するモノ。形がなくてもいい。(Ex.音楽)
- Olson「財の中で集合財は特別。」
- 一般の財 … 個人が持って、個人の欲望を満足させる。(Ex.飲み物、シャーペン)  
ある人が使えるが、他の人は使えない。  
(Ex.高橋のお茶は飲めない。同じお茶を買っても、それは高橋のではない。)
- しかし世の中には、これと性質の違うものがある。

Ex.空気、公道 … 集合財 collective goods  
 = 公共財 public goods  
 = 共通財 common goods } ともいう。

ここで“常識を覆す理論”の登場。

Olson「合理的個人からなる大規模集団は、決して集合財を選択しない。」

1. 大規模集団 → ある個人が犠牲を払ってもあまり効果なし。  
Ex.CO2を減らすために、ある個人がガソリン自動車をやめて電気自動車やバス、電車、自転車に切り替える。

(みんなで申し合わせたり、ガソリン自動車を多用する人を世間が白い目でみるようにすれば話は別だが…)

- ① (自分が率先して cost を払っても)他の人の選択は不明。  
→(自分が率先して cost を払っても)集合財を手に入れられるとは限らない。  
(これに対し、個人財は自分が cost を払えば確実に手に入る。)
- ② 逆に、自分が cost を払わなくても、他の多くの人自分たちの自発性にもとづいて Cost を払えば、自分は何の cost も払わず集合財を手に入れられる。  
(Ex.自分が自家用車をやめずとも、他のみんながやめれば…)

2. 大規模集団 → 個人がどのように行動しても目立たない。(1,000人、2,000人の村なら別だが)

2つの意味がある { ①活躍しても称賛されない。(自家用車やめたって…)  
 ②犠牲を払わない上に集合財を手に入れても、非難されない。

3. 個人が合理的なら、一番得な「犠牲を支払わず集合財を手に入れる」選択をするはず。  
 こういう人 = free rider (もとは“電車のタダ乗り”) という。
- free rider のこわいとこ … みんなが free rider になると公共財がもたない。
  - もちろん、現実の社会とは随分違う、理論上の話。

では、現実はどうか。以下解決策。

- ① 独裁制 dictatorship  
 Ex. ヒトラーのアウトバーン、聖武天皇の奈良の大仏  
 ※独裁制を推薦しているわけではない。
- ② 政治的企業家 political entrepreneur  
 (資本とアイデアを企業家が取り持つ、というのは経済の話である。それとは別。)  
 Ex. ある人…自分自身の損得を度外視、個人の合理性を捨て、  
 集団としての合理性を保持。  
 → 自家用車をやめる。  
 → みんなに呼び掛ける  
 「みなさんもやめましょう、そうすればきっと空気は綺麗になります。」  
 まとめると、政治的企業家は、  
 個人の合理性を超えて集合としての合理性を考え、他の者たちに呼び掛け、  
 自分についてきくれる者と一緒に実行する。

## 315 特徴と批判

- (1) 精密な議論 → 我々の社会は精密ではないから、現実離れしてしまうという短所がある。
- (2) 合理的人間観 … わりと短期的・現実的 (Ex. 損か得か)。→ 哲学的とはいえない。
- (3) 個人主義 (個別主義) individualism

ギリシア哲学では、

{	holism … 全体論。ものごとを全体として考える。
	↑↓
	atomism … ものごとはその構成要素に分解して、その構成要素を考えればよい。 があったが、個人主義は後者。→ Σ の理論。 ※個人を超えたところに何かある、と考える人はむしろ全体主義として排除される。

1. 長所 … 徹底した liberal、徹底した democracy  
 ただし、Olson の解決策 (上述) のように、外から論理を持ってくる必要はある。  
 それでもここまで徹底するのは大事。  
 個人より全体が大事と思ったら、ファシズムに陥る可能性が生じる。
2. 短所 … 徹底した個人主義。  
 我々は自分なりの選好順位を考えるが、人と話しあう (さまざまな形で。  
 本、インターネット、…。Deliberative democracy をある意味実践。) ことができる。  
 あるいは、それにより意見が変わることもある。  
 彼ら (アロー、オルソン) は、人間のこういう interactive な関係を考えていない。  
 (だからこそ、議論がサクサク進んだ。)

## 320 集団理論 group theory—A.F.Bentley&amp;D.Truman

## (1) 起源

- マルクス一階級ごとに意識を持って行動。(19c)
- しかしアメリカ(20c)一階級という概念があまり当てはまらない時期があった。  
→アメリカの理論を紹介。
  - ① アメリカは流動的社会。(アメリカン・ドリームに表されるように。)
  - ② ヨーロッパの個々の国と比べれば圧倒的に広く、人口も多い。  
中心都市が一つと決まっているわけではない。多元的。

⇒ アメリカは、流動的かつ多元的。

## (2) 集団理論と集団の形成

人々はばらばらに行動するのではなく、それぞれの interest にもとづいて集団を形成する。

$G=f(lr)$  ※lr:集団を構成する個人の利益関心。

## 321 利益集団 interest group

- 同じ利益関心を持った人が集まった集団をいう。別に政治活動をしなくてもいい。
- 現在では圧力集団 pressure group という言葉の方が馴染みがあるかも。

圧力集団 pressure group

- 政治活動に力点を置く。
- 政治過程(Ex.政策の作成、マニフェストの作成、法案作成、…)に対して  
圧力をかける。アメリカでいう lobbying。  
Ex.interest が同じ経営者が集まる→声明発表「日本の法人税高いよ。」  
労働者が集まる→労働組合結成

1. 経済的 or 社会的状況に関連して特定の政策を求める人々の集団。  
※このへんの話は集団理論が最初にできたときの話であり、現在はこの集団は  
「圧力集団」として「利益集団」から分離されている。
2. (利益集団の)interest はこの集団の活動によって観察可能である。  
利益集団は先ほどのアメリカの話と対応していて、流動的集団である。  
すなわち、人々は政策分野や争点ごとに異なる利益集団に属することもある。  
Ex.工場労働者として休暇の恒久的増加を求める利益集団に属しつつ、  
原発に反対する利益集団に属する。

新しい形の集団

直接に自分の利益関心とは結びつかないけど、積極的に政治に関わろうとする。

Ex.環境保護団体

Interest は自分に直接かかわるものであるという見方にこだわれば彼らは自分の interest  
というよりは理念に従い行動している

＝提唱団体 advocacy group も出現してきたといわれている。

(1) 利益集団の interest

1. 何に注目するか(争点ごとに組みかえられる集団であるから)

① 特定の争点

② 政策を求めて能動的に参加するすべての人々を特定。

(観察可能でなければならないから。)

→彼らは求める政策ごとに分けられる。

(①、②により、余る人も重複する人もない、という前提に立つ。)



2. 利益集団の利益関心の大きさは測定できる。

$$\text{利益集団の利益関心の大きさ} = \frac{\text{特定の政策を支持する人の総数}}{\text{政策を求めて能動的に参加する人々の総数}}$$

3. 客観的利益アプローチ

利益集団に参加する個人の利益は、その人物の活動により客観的に測定可能。

(客観的にわからなければその人は“能動的に参加していない”。)

(“客観的利益アプローチ”はあとで問題になる。そのことについては後述。)

322 A.F.Bentley 著書『the Process of Government』(1908)

Bentley はちょっと変な人。もとは哲学者か何か。政治学関連の本はこの一冊。  
引きこもって思索に耽っていたらしい。

(1) 彼はこう考えた。

1.  $G=A=I$  … 「集団とは活動であり、活動とは利益である。」

※G:集団 group

A:活動 activity

I:interest

Gとはふつうの集団ではなく、特定の政策目標を実現するための個人の集まり。

このGの定義に「この集団は活動(Ex.マスコミをつうじて訴えかける)するんだ」ということも含まれている。

2. このGのAとは、何のための活動か。

このGとは“特定の政策目標を実現するため”集まっている人々。

→その背後に似たような interest を持っている。

Ex.子供手当をちゃんと国民に払いたい、高速道路無償化反対、…



集団とは活動だが、

AとはそのGが実現させたい or 守りたいという interest を確保するためのもの

⇨  $A=I$

(2) 注目すべき点がいくつかある。

1. 政治過程 political process

- 実は後に彼の考え方が political process という新しい分野を切りひらく考え方だといわれた。(本人はそうは意識していないが。)  
※proceed:進める、段階を追って進んでいく、という感じ。

“段階を追って進む”とは？

政治過程論が出るまでは制度の問題として(一院制 or 二院制、…)  
行政の問題として(官僚やエリートが主体)進められてきたが、  
政治過程論では利益集団が主体。  
利益集団が関わって、切磋琢磨して、段階的に政治を進めていく。

- 政治過程論では利益の特定が重要。

2. 特定の利益

- なぜ“特定の利益”か？→マルクス主義との対応がわかりやすい。  
特定の利益に注目＝具体的。観察可能な集団に注目。

マルクスの階級理論では社会の中の特定の人々には共通の状況があつて、  
よつて共通の利益関心がある。この共通の利益関心の違い＝階級。

————→ 共通の利益＝階級利害

————→ but 階級は単純、抽象的。→特定の争点と結びつけにくい。

Ex.だからこそ、第一次世界大戦時には階級を超えたプロレタリアートよりも  
マルクス主義者たちは愛国心を選んだ。

- 活動 activity に注目 … 観察可能か否か、それが問題。  
(マルクスの理論と違って)利益集団論ははじめから数量化できるように理論を設定。  
→activity も数量化できる。(activity の数量化は今でも行われていることである。)

3. 評価

Bentley の議論は当時はまったく評価されなかったが、  
政治に関する新しい見方を提示しているのでなかなかすばらしい。  
これを再発掘したのは…

David.B.Truman

- 行動論革命の大将といつてもいいほどの人物。
- いささか Bentley の考え方と違う。
- 著書は『the Governmental Process』(1951)。

(1) Interest group の定義

1. ある状況に関連して求められる目標について要求、主張。  
世の中様々な状況がある。(Ex.デフレ、リストラ、…)  
その状況に関して、よりよくしようとか、もうちょっと幸せな社会にしようとか主張。  
(Ex.友愛の精神をもって ゆきお)
2. 他の集団に対する要求や主張によって観察可能になる。  
Ex.労働者は賃金が低くて困っている。→労働者「賃金もつとあげろ」と要求  
→その労働者の interest group が観察可能に。
3. 共通の態度 attitude をもつ。

× 一度限り

○ある程度継続的。現代でいう behavior。

→ a、b、c を満たすのが interest group。

Bentley と Truman の、interest group に対する考え方における違い

Bentley: G があれば A するし、A は I にもとづいている。(Truman より広い、抽象的な定義。)

Truman: 目標があるから、他の集団に対して主張しなければならない。

(Bentley より狭い、具体的定義。具体的とはすなわち、政治過程に密着するもの、ということ。)

→ Truman の方が、現代で言う“圧力団体、圧力集団”と呼ばれるものである。

(2) 政治過程 … 利益集団の定義が狭いために、political process の考え方が Bentley のものと違う。

- S→D→P … 「S が D になり、そして P になる。」

※S:安定 stability

D:混乱 disruption

P:抗議 protest

ちらっと復習—制度化

人間というのは、例えば山道のように、他の人が通った道を通ると簡単。

人が価値を手に入れる方法とは基本的に限定されている。

そのように目標とする価値に応じて定型化された行動様式がある。

→我々の社会は定型化された行動様式=制度の集まり。(以上復習。)

基本的にすべての集団は定型化された行動にのっっている。

→社会全体が制度化された集団の集まり。

1. S … 制度化された集団

参加者の interaction→安定(基本的に同じ行動をする。)

Ex.徳川 300 年平和。基本的に安定、同じ行動。武士の規律や家制度というものがあって、個人が死んでも家が残ればいい、という考え方。→いつ戦場で死んでも、名誉のため腹切っても OK。

2. D … 状況の変化 Ex.浦賀にペリー来航。  
状況がくつがえる。安定だった行動様式が安定でなくなる。
3. P … ある程度混乱が大きかったとき、新しい状況に対応する集団が出る。  
(※いつも D→P とは限らない。 Ex.島原の乱の鎮圧)

新しい集団→政府に対して抗議。

Ex.「分散型の社会じゃダメ。明治維新につながるような要求。」

Truman「D がある程度大きかった段階で利益集団ができ、  
P の段階で政治的利益集団(現在でいう圧力団体、圧力集団)ができる。」

ここで問題点: 観察可能な interest がないところで政治への抗議が起こる。

⇒ “客観的利益アプローチ”がまずいのではないか。

324 Truman 以後の集団理論 — 大きく3つの点で彼の理論を補足、修正する議論。

(1) D→P への移行 … Dがある程度大きかった時 Pとなる、の「ある程度大きい」が問題。

Ex. 管「消費税上げます。」=D→反対の人は P

→ではそもそもどのぐらい D が大きいと人々は抗議するのか。



費用=効用論(cost-benefit 論)

Ex. 消費税が5%→10%となると多くの人々が不満。

では、政府に抗議するのにどのような cost を払うのか。



1. 組織費用 organizational cost

Ex. 不満→デモ or 首相官邸前で叫ぶ

この場合での組織に参加する cost = かかる時間、TV に映ってしまうこと、右翼に絡まれる、…

政治的利益集団に支払う cost が大きすぎる→抗議を諦める、ということもある。

よって organizational cost がどのくらいなのか考える必要がある。

2. 抑圧費用 repression cost … 抗議には何らかの制裁が伴う場合がある。

いくら民主的国家でも、政治的抗議はタダでは済まない場合がある。独裁国家では命がけとなる場合もある。

Ex. 財務省の職員が増税反対デモ参加→職場のみんなが話してくれなくなる。

=これも一種の制裁。

Dによって生じた loss > 組織費用+抑圧費用

→政治的利益集団に参加する。

Dによって生じた loss ≤ 組織費用+抑圧費用

→政治的利益集団に参加しない=沈黙 acquiescence

よって、第一の修正点 ↓

S → D ~~→~~ P      ならば

↓  
→ Acquiescence という場合もあるだろう。

(2) 新しい政治過程の発見 — S→Protest→Social Transformation 社会変革

これが問題になった一つの有名な事件 ↓

Montgomery のバスボイコット事件

- 1955 年 アラバマ州都 Montgomery
- 60 年代末の公民権運動より前→当時の南部では公然と人種差別。公共の場で白人とアフリカ系アメリカ人を区別。(Ex. 映画館でも席を分離。)



- バスの座席でも白人用の席とアフリカ系アメリカ人用の席があった。  
※公共の市バスである。私鉄ではない。(レストランでも同じ状況であった。)

あるとき、勇敢なるアフリカ系アメリカ人中年女性がいた。  
彼女は一日中働いて疲れていたうえに、白人用の席が空いていた。  
→座った→運転手「どけ。」  
→拒否→警官が呼ばれて、彼女は逮捕

- 座席の区別は日常的にあった。奴隷時代からあった。  
→当たり前として受け入れていた。  
アフリカ系アメリカ人が白人用の席に座るようなことがあっても、注意されればどいた。

しかし彼女は逮捕される方を選んだ。  
→バスごときで逮捕されるなんて！と問題になった。  
→アフリカ系アメリカ人のバスボイコット(その指導者が後のキング牧師。)

- 今までちょっとしたトラブルはあっても、Dはなかった。  
つまり、Dがなくても抗議が起きる、ということである。  
→Sの問題＝幸せなSじゃなかった矛盾を抱えたSだった。  
抗議はSの矛盾を取り除くための社会変革のためのもの。

### (3) 主観的利益アプローチ

上の例では Protest が起こった。しかしそれ以前に目立った声をあげる者はなかった。  
たまたまその中年女性をきっかけに火がついた。  
→社会を変えようとする interest が社会にあったのか？

ここで、Truman の

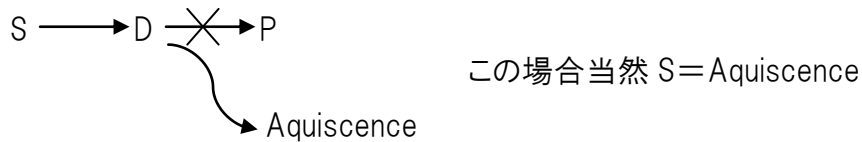
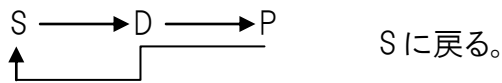
「interest は測定できなければならない。目に見えなければならない。」＝客観的利益アプローチ  
という姿勢を貫くなら、上の例において interest はゼロである。  
→上の例にみられる政治過程は成り立たない。

しかし、多くのアフリカ系アメリカ人も一部の白人も、矛盾を感じていたはず。  
→interest は客観的なものだけじゃない。主観的な、表に出ないものも考えようじゃないか、  
という意見が出てきた。  
→主観的利益アプローチ

325 →とばす

326 集団理論の特徴と批判

social transformation という考え方も出たが、  
基本的に Truman の理論は我々の社会の安定状態を前提としている。



1960 年代前半、古き良きアメリカ。

ベトナム戦争でアメリカン・ドリームがズタズタにされる前、第二次世界大戦の後。

政治過程の到達点は社会の安定状態だった。(social transformation の到達点も然り。)

(1) では、本当に社会は安定なのか？

→すべての社会が安定ではない。

明らかに不安定な国も多いし、一見安定でも様々な不満、矛盾、要求を抱えている国もある。

→むしろ社会とは不安定。安定を前提として考えるのは著しい間違いじゃないか。(第一点目。)

- ところで、Truman は「政治は流動的であり、これを political process と名付け、研究する」と言ったが、「流動的」と「安定」は矛盾しないのか？

これに対し、Bentley は「集団とは活動である。集団は活動をしていなければ…」と述べたので甚だ流動的である。

→Bentley と比較すると明らかであるが、Truman はむしろ static である。

(ちなみに、マルクスの階級闘争(階級の潜在的活力をいっている)もダイナミックな理論である。)

(2) 合理的人間が前提とされている。(324 の(1)の cost の話のところ。)

※合理的人間=前述の cost の話のところのように、冷静に cost を考える人。

→人々が異議を唱えるとき、果たして合理的に cost を計算しているだろうか？

(Ex.フランス革命、安田講堂事件)

→もっと非合理的なもの(Ex.得体のしれない情熱)が社会を変えることもある。

(3) 利益集団の形成

「争点によって自由に組み替わる集団」というのは、ある程度まで「流動的なアメリカ社会」の実態を反映している。しかし、アメリカの組織(Ex.全米ライフル銃協会)とヨーロッパの組織とを比べると、アメリカの方がゆるい。アメリカの方が個人がより自由。

→集団理論の考え方で、アメリカ以外の社会は見られないんじゃないか。

→アメリカ以外ではがっちりとした組織(家族も参加するような)の中で人々は活動しているんじゃないか。

=団体主義 corporatism(アルトジウスの社会契約論も一種の団体主義)

(もとは中世の「人が団体として行動すること」を言ったもの。)

☆ 現代の団体主義は Neo-Corporatism

南アフリカでもっとも強く、もとは南アフリカについていわれ、他国にも適用された。

アメリカ以外の国々ではかなりの程度でこの傾向がみられる。ヨーロッパで強い。

※南アの有名な三団体:軍隊・カトリック教会・労働組合

→で、結局、集団理論はアメリカ流の政治理論である。

400 政治社会の理論

まず非常に大雑把な話から。

401 政治社会の考え方の歴史

※政治社会=我々の社会の政治的側面をみたもの

(1) ギリシャ=ローマ時代

Polis(これはわかるだろう。)

Res publica(古代の共和国。人々が集まって作る政治体制。英語の public の語源。)

→どちらも、どういう組織をつくるか、という政治機構の話。

(2) 中世 … 2つあった。

1. Civitas dei … キリスト教共同体の理想概念。

「神の国」「絶対者である神に信者の一人一人が結びついている」

2. 封建社会のイデオロギー … 基本的にこういう議論は有機体論である。

基本的特徴:一種の全体論。社会全体が一つの有機体。(p.20 参照)

Ex.たとえば、花で言えば、花が貴族、根が農奴。

農奴は存在は認められているが花にはなりえない→身分制を固定。

(3) 近代 … 2つあった。

1. ジャン＝ボダンのような絶対主義のイデオロギー（最初から後ろ向きなものではなかった。）  
既存のすべての権利を超越する権利＝主権を考える  
→国王に与える  
→絶対主義国家(こうしてフランスは一つにまとまった。)

2. 近代政治イデオロギー Ex.ホッブズ、ルソー、ロック、…

自由主義的(＝個人は自由、平等)かつ、社会を契約によって成り立つと考えた。

- ここで考えられている個人とは自由かつ平等、合理的。  
(まさに近代の人間観。近代自由主義の考え方)  
＝citizen(英)、citayan(仏)、市民
- しかし、彼らがこの議論をしたときは“大ウソ”だった。  
すべての人が合理的ではもちろんなかった。  
→擬制 fiction＝事実でないことを前提としてよりよくしていこうと考えた。
- 我々の社会もそれを前提としている。
- 料理(＝アナロジー)の材料＝合理的市民+調理法、レシピ(組み合わせ方)  
→dish
- 政治でいうとどうか？  
本当の料理なら材料をチェックするところだが、政治では無理(人権問題に発展)。  
Ex.19c、保守党(英)  
選挙権拡大に反対したものがこう言った。  
「人間のかたちをしたモノに選挙権を与えたら大変なことになる。」  
＝大変な差別意識。  
→これに我々が反感を覚えることからわかるように、今ではこういうケチはつけられない。
- レシピ＝機構の話  
Ex.代議制 or 直接民主制、少数選挙区 or 比例代表制、…
- 市民+機構→良い政治。
- 政治過程論に至るまで、なぜ機構が重要視されたか？  
→市民にケチはつけられなかったから。

ちなみにマルクス主義ではこう考える。

## 402 マルクス主義による政治社会の理論

- (1) 階級社会 class society … 古代以来、すべての社会は階級社会である。  
(基本的に、社会の中は利益の相対する階級に分かれている。)  
Ex. 領主 ↔ 農奴  
絶対君主 ↔ 臣民 subject  
資本家 ↔ 労働者(←現代)
- (2) 階級闘争 class conflict … 「人類の歴史は階級闘争の歴史である。」  
階級闘争 = 支配する階級が独占している特権を支配されている階級が奪い取ろうとする闘争。
- (3) 国家 = 暴力操置(暴力装置) … 階級が争い合う状況の中で、国家は暴力装置。  
支配階級の特権を守るために、  
それを奪いに来る者たちを押さえつける。(警察、軍、裁判所、…)

階級闘争論における政治社会  $Sc=f(P,Cf)$

Sc: society. ただしマルクスの場合は階級社会。

P: power = 権力

Cf: conflict = 階級闘争(マルクスの場合は)

## 420 機能 = 構造論 functional-structuralism

1960年代はじめ、当時としては画期的な本が出される。

G.A. Almond & J.S. Coleman (編集) 『The Politics of the Developing Area』(1960)

… 開発途上国の政治をはじめて正面からとりあげた。(歴史的。)

それまでは「まともな政治なんかないから研究しなくていい」と考えられていた。

数年後に彼らは理論の本を書く。

G.A. Almond & G.B. Powell Jr.

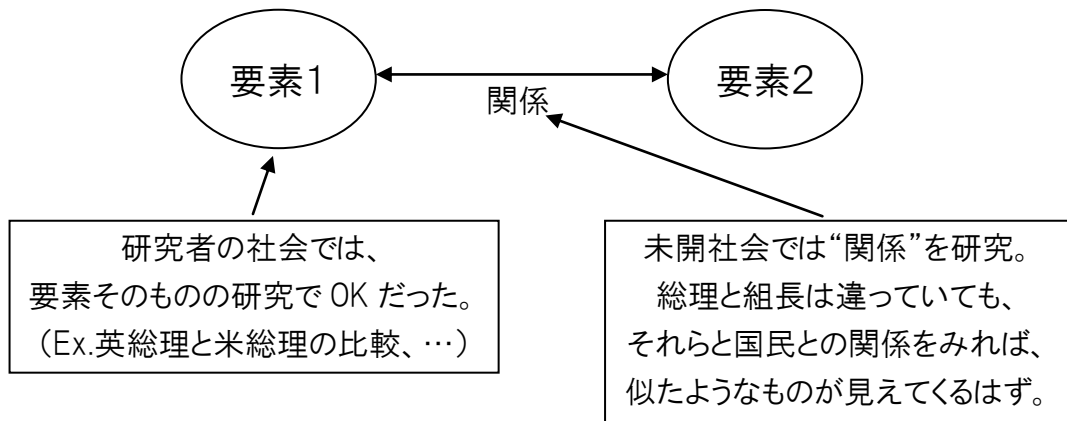
『Comparative Politics (比較政治論)』(1966)

(いまだに2、3年おきに新版。大学生のテキスト。)

## (1) 源泉

## 1. 文化人類学(遠い源泉) … 19c 後半発達

- 未開社会の研究
- 悲劇 … 研究し尽くされて未開社会がなくなって最近元気がない。
- が、色々な分野に影響を与えている。
- 研究者の暮らす社会と未開社会は全然遠いので、未開社会は研究に値しないと思われていたが、それを文化人類学が否定した。
- 実体(Ex.総理大臣、ジャーナリスト、大学、…)だけを見てはいけない。  
実体を探していたのがそもそもいけなかったのだ。  
Ex.ジャーナリストや知識人が未開社会にいたくとも、例えば占い師がいる。  
総理大臣が未開社会にいたくとも、リーダー格の者(Ex.組長)がいる。
- 実体 $\longleftrightarrow$ 機能
- 機能を探せば、未開社会も我々の社会と同じように成り立っていた。

2. 構造—機能論 Structural functionalism … 第二次世界大戦後、アメリカ合衆国。  
(機能—構造論でもどちらでもいいらしい。)

我々の社会は、要素だけに目を向けると、要素は変化している。

我々は見ついでに見える要素ばかりに目がいきがちだが、

我々の社会は比較的安定した機能の組み合わせから成り立っている。

Ex.米の大統領たちは個々の要素を見れば一人一人違うが、

国民全体への機能、政治的機能としては比較的安定している。

- 安定した機能の組み合わせ＝構造
- これを大々的に政治の話に持ち込んだのが G.Almond

(2) Structural functionalism と政治社会

我々の社会を構造と、その背後にある文化とから成り立っていると考える。

Sc=f(Sr,Ci)

Sc:society

Sr:政治構造 structure

Ci:政治文化 culture

- 余計なものを取り去っていけば、一番重要なところ(=構造)はどこも同じ。  
※日本、アメリカのような民主国家であれば。北朝鮮等の例外もある。

Ex.建物の話

余計なもの(壁に貼ってあるものとか)を取り除けば、  
柱や壁等のみ(=構造)のみ残る。

421 政治システム

=D.Eastonによれば、政治行動 political behavior から成立する集合体。

我々の社会は行動から成り立っていて、政治に関する行動を全部とりあげたものが政治システム。

Almondによれば、政治システムという見方から我々の社会を見たとき、

政治システム=政治構造+政治文化

Ex.建物の話

基本的な柱や床材=政治構造

それ以外=政治文化

→どんな建物も基本的に同じ構造(じゃないと建たない)。

それぞれの政治システムの違いは、政治文化の違いによる。

(1) 政治構造 political structure

1. Almondによれば

[定義]相互に関連している役割の集合(体)。

社会学の役割理論から来ている。

Easton — 行動そのものを取り上げた。



Almond — もう少し簡潔、具体的。

2. [説明]役割 … 一人の人間が場面場面に応じて複数の役割を演じる。

→政治に関しても様々な役割がある。

(Ex.政治家、官僚、政党支持者、…)

(2) 政治文化 political culture

1. [定義]我々はさまざまな役割に従って行動しているが、

「役割に応じた行動」の背後にある心理的性質＝政治文化である。

Ex.なんで日本の選挙で立候補する人たちはあんなに「お願い」をするのか。

英、米では「議論」(候補者間での)、「有権者に質問の機会を与える」等である。

→どちらも機能という観点からすれば「支持の調達」である。

→しかし、実態は随分違う。

→その社会にある文化独特の性質がある。

=political culture

2. [説明]政治文化≠文化一般

あくまでも、「政治に関する文化」である。

3. [種類]4つある。

- a. 政治態度 political attitude

- attitude は、心理学でいう attitude。
- 日本でふつうに使うところの「態度」(Ex.なんだお前その態度は。)ではない。
- ここでは、「心の向く方向」の意。

Ex.同じ TV のニュースを見ている、同じ情報を与えられても、

attitude の違いによって注意を向けるものが違う。

- b. 政治信念 political belief

- 社会によって(人によっても)違うはず。

Ex.ある社会 … 誰にもチャンスが与えられ、その中での競争は良いものだ。

ある社会 … そんな激しい競争でなく、ゆるやかな競争が望ましい。

→根本的に「これが良い」と考えるものが違う。

Ex.«格差より活力»か«活力より格差»か。

=c. 政治価値 political value

- d. 政治技術 political skill

受け取る側に上手く受け取らせる技術がそれぞれの社会にある。

Ex.日本«苦しい戦いなんです…» → 一票

アメリカ«苦しい戦いなんです…» → «ギリギリのところならこんなヤツには入れまい。」

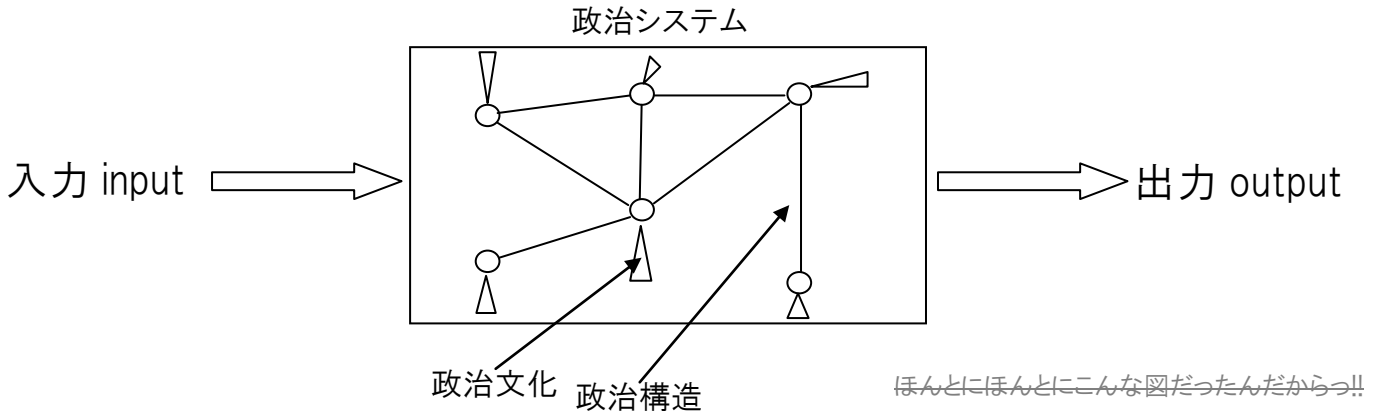
英米系では政治家があまり感情を露わにするのは好ましくないと考えられる。

⇔ ラテン系(仏、西等)では、泣いてみせたり愛人がいたりするとむしろ  
「彼は人間らしい」と思われる。

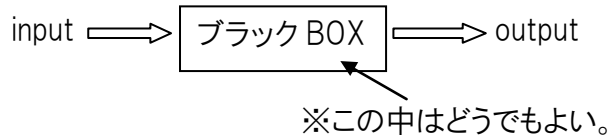
→感情に訴えた方がいいと思えば、泣いてみせるのも skill。



(3) 政治システム … 役割の集合体である構造と、その背後にある文化から成り立っていて、



一つまたは複数の input を受け入れ、  
一つまたは複数の output を出す。



Ex.自動販売機 … その中がどうなっているのかはどうでもいい。  
ちゃんと金を入れて品物が出てくればよい。

この定義の良い所

- 構造は全部同じ→同じものとして分析できる。
- 同じでないものは全部文化に預けられる。  
(大変問題ある定義だが。それについては後述。)

## 422 政治システムの機能

(1) 入力機能 input function … Almond は代表的な政治システムの入力機能を列挙した。

### 1. 政治的社会化とリクルートメント

#### 1) Political socialization

子どもから青年期には我々はいつも社会化の訓練を受けている。

= 社会に適応するように訓練を受けている。

(Ex.学校の勉強、親の注意、…)

ある社会の構造や文化をその社会の若い人に伝える

= socialization

(Ex.我々は小さいころから「多数決」や「民主主義」を学んできた。)

- 大きな役割を果たす。
- これにより社会が安定。  
(若者すべてが社会の転覆を狙ったら安定しない。)

2) ポリティカル リクルートメント Political recruitment

社会化された後に、特殊な何か(Ex.役割、文化、…)を身につける場合がある。

Ex.東大工学部はここ 130 年くらい、

日本の重要な political recruitment の機関

※1)も2)も入力機能。

2. 利益表現(利益表出)interest articulation

※articulation … 言葉の一音節一音節をはっきりと発音すること【言語学】

a. [定義]個人や集団が政治的意思決定を担っている人々に対して様々な要求をすること。

基本的には利益集団 interest group が果たす役割。

b. 方法

① 物理的デモンストレーションと暴力

Ex.押しかけて大声で叫ぶ、火炎瓶、ロケット弾、自爆テロ、…

② 個人的コネクション

Ex. ● 自分たちの一族から政治家を出す。

→出世

→血縁関係(=閥<sup>けいばつ</sup>)によるコネクションを作る。

● 学閥もなくはない。

● 地縁によるもの。

Ex.イタリアでは今でも地縁はわりと重要。

日本でいえば「長州出身だから…」等

③ エリート代表(②より大っぴら)

自分たちの仲間(自分と意見が同じ者)を政治家や官僚にする。

Ex.大会社の社長が息子を議員にする。

④ 制度的・公的チャンネル … やはり一番重要(日本でも)

=人々の要求を表明する道。

※チャンネル:①チャンネル、②経路、③海峡、④水路(Genius 英和第四版)

→水路的な something をイメージしましょう。

● マスメディア。街頭インタビューなんかもそう。

● 選挙で議員を選ぶからには、議会もそう。

● 官僚。これは公的チャンネルに近い。

不満や意見を伝える部署へ要求を表明。

→上記のようなもの全部ひっくるめて、

人々が要求を政治システムに伝える。

3. 利益集約 interest aggregation … 一般用語として最近は使われる。
- a. [定義] 様々な、ときには(あるいは) 相対する要求を具体的な政策にまとめあげる。  
Ex. 高速道路

(みんな勝手に要求するから) 政党や官僚組織が色々な方面をにらんで、一番人々の意見が無理なく通るところに落ち着かせる。

- b. スタイル(がある)  
= 特徴的なやり方

① 実利 = 取り引きスタイル

様々な interest を市場で売り買いするように扱う。

Ex. 「みなさん、私がこの道路を作りました。だから私に一票を！」

② 絶対価値志向スタイル

多様な interest を世界観やイデオロギーに還元する。

Ex. 「普天間、ダメ、ゼツタイ」「沖縄には基地増やさない」= 価値

( $\longleftrightarrow$  ①型の政党としては「じゃあ議席も少ないのでおやめください」)

※ ②だけだと政治はまとまらない。①だけだとあまりにも下品。

③ 伝統的スタイル

過去と同じように多様な利益を取り扱う。

Ex. 「昨日と同じように or 10 年前と同じようにやりましょう」

- ◇ 入力機能は面白い、使える。
- ◇ どちらかというと出力機能はおもしろくない。

(2) 出力機能 output function

1. 規則制定機能 the rule-making function  
法律とかを作る機能のこと。
2. 規則適用機能 the rule-application function  
官僚が法律、自分たちが作った行政規則を適用していく。
3. 規則判定機能 the rule-adjudication function
  - 裁判所が担う。
  - 2. 規則適用機能と区別するのが難しい場合があるが、裁判所は官僚機能と別に作られているから Almond は独立させた。

(3) 通信機能 communication function

- (1)、(2)と並び立つものではない。(1)、(2)を別の角度から眺めたものである。
- 「(1)、(2)は communication 機能として行われるものである。」  
Ex.ロケット砲で国会破壊。  
→不満がコミュニケーションとして伝わる。  
「破壊」そのものではなく、「壊すくらい大きな不満」があることが重要。

7/14

423 特徴と批判

(1) functionalism

1. [批判]機能主義はその大部分が一種の均衡論。

＝バランスが取れていること  
上手く機能していること } を前提としている。  
→現状維持の議論

世の中 Almond が見る限り上手く機能できていたのだが、  
何故上手くいっているかを説明するための議論であって、  
ダイナミックな社会変動(革命など)は説明できない。

2. [特徴]Almond は政治システムという言葉を使い、  
その中身を2つ(一構造と文化)に分けた。  
(↔D,Easton は抽象的。→みんなあんまり読まなくなった。)  
⇒ 具体的に政治システムの中身を見ることができた。  
(→今でも読まれる。)

ただし、問題がある。

(2) 政治文化 political culture

Almond はすべての政治システムを構造と文化に分けた。

→ファラオの時代～現代先進諸国にまで通用するような同一性を表している。

※復習↓

構造はどこもだいたい同じ。(Ex.集合的決定、資源を集約的に使う、人々の生活への配慮、…)  
→政治システムの違いは政治文化の違いによって説明される。  
Ex.米、日の政治システムのすべての違いは、  
政治文化の違いにより決まる。

⇒ ある意味無理な話。  
すべてが心理的背景で決まるのか？  
どこまでが政治文化なのか？

⇒ 政治文化＝残余類型 residual category  
＝類型化しえないものの余り。

→ ちょっとひどすぎる。

- すべての異なる点が政治文化により説明されるのに類型化できないのはいかなものか。
- 高橋氏は政治文化が嫌い。  
→ 政治文化と Almond が言ったものを、論文では、  
使わなければならないギリギリの状況にまで持ち込んでから使う、らしい。
- 政治文化は曖昧。政治の難しさをすべて背負わされた概念。  
→ 逃げるには便利。

500 講義を終わるにあたって concluding remarks

現代政治学の政治理論を中心とした議論をしてきた。

↓  
話しておきたいこと。

501 なぜ政治理論か？

一般的な教養の政治学をなぜしなかったのか。

＝政治学の基本的知識→扱ってこなかったわけではないが、  
この講義は入門的政治学の講義とは違った。

たいていの入門書(テキストでもそういうものもあるが。)

- ↓
1. 理論の持っている暗黙の前提にほとんど触れていない。
  2. 政治哲学史を除いて、現代政治の理論が持っている歴史的、社会的背景に触れていない。
  3. 理論そのものの論理構造、理論の組み立て方にもあまり触れていない。

しかし、理論だけでなく我々の常識でさえも、前提や要因が変われば変わりうるもの。  
→ 理論をその考え方や構造を忘れて結果だけを覚えているとかえって害になる。

それ以外にも高橋氏の講義の独特な点として、

- 1) 現代の多様な理論を統一的にまとめた。(数式などを用いて。)
- 2) Political science を政治理論、政治哲学や政治イデオロギーと一括して扱った。  
つまり「Science という考え方を振り切った」、らしい。

↓  
では、science とは？

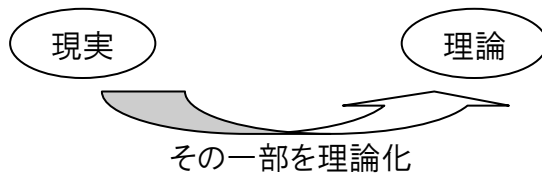
502 科学的理論の本質

変わり者の物理学者、P.K.ファイヤーベント

『方法への挑戦』—物理学を例に、science とはどういうものか、を論じる。

彼の主張は次の3点に要約できる。

1. どんな理論でも、現実の一部分しか説明できない。
  - 現実＝経験的事実(経験するすべてのもの)
  - 個人の経験は狭い。  
→他の人が経験したことで現実、経験的事実だと認める。  
(Ex.月の重力、ビックバン、…)
  - 現実が多様。世の中いろいろある。  
したがって我々は現実の一部分を切り取って議論している。



- すべての現実を理論化する理論などない。

すべての現実を理論化する3つの理論

1. すべては偶然である。
2. すべては神の御業である。
3. ~は〇〇(Ex.KGB、CIA、北朝鮮、アルカイダ、…)の陰謀である。

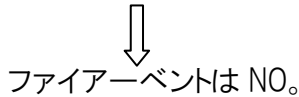
…っていうのは冗談。

2. では我々は現実(経験的事実)をどうやって確認しているか。



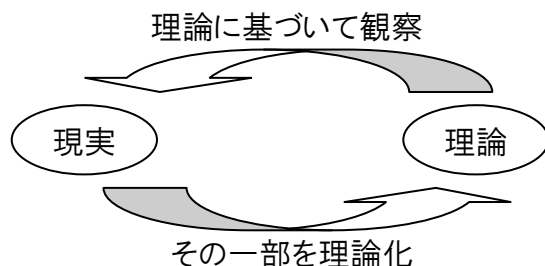
Science の基本は観察。

ところが、この「観察」とはほんとうに客観的か。



- 観察は客観的ではなく、理論や方法によって限界づけられている。  
＝すべての人が同じに行えるものではない。  
観察者の心の中にある理論や方法によって結果は変わる。  
Ex.なぜガリオだけが教会からお叱りをうけたか？  
(ガリオ以外にも望遠鏡を持っている人などいたはずなのに)  
→ガリオだけが地動説に気付いたから。

つまり、どうなるかというと、



Science は基本的に上のような構造の堂々巡りである。

→それでは科学の進化は起こらない。

既存の理論から新しい理論は生まれない。

新しい理論は、以前は馬鹿馬鹿しいと思われていた前提、過程をして、  
新しい観察をすることによって生まれる。

3. 理論が成功する条件 … 成功するかしないか、条件が2つある。

a. 対抗理論の排除

= 他の理論を具体的に攻撃

Ex. 「私の理論は OK だが、他の理論は説明できない。」

↓  
みんなパンチを受けないようにする。

b. 経験的内容の減少

= 切り取ってくる現実を小さくする

→ ガードは固くなる (理論はつまんなくなるが。)

Ex. 世界の大学生っていうのは…あ、いや日本の大学生っていうのは…

…あ、じゃなくて東大の学生っていうのは……………いやむしろボクの友達は…………

ちなみにこれは物理学では、「実験の条件を限定」することにあたる。

⇒ Science はイデオロギーや哲学とは違うが、万能ではないのである。

## 503 理論の相対化に向けて

☆ 私は相対主義者ですー高橋氏

### 1. 暗黙の前提

→これを飛ばすと背後にある偏向、バイアス等が見られなくなる。

理論に書かれていないことまで読み取ることが必要。

### 2. 歴史的・社会的背景

理論を作る人間もこの背景の中にある。

→歴史的・社会的限界がある。

＝特定の時代、場所において理論が作られている。

※“だからムダ”ではないが、背景を知るのは重要。

### 3. 分野の限界

ある分野で上手く説明できた理論が他に適応できるとは限らない。

※ちなみに価値は序列化できる。

人間は社会的動物だから、価値の相対化は無理である。

☆ 私は価値に関しては相対主義者ではありませんー高橋氏

## 510 特別付録

たかはしせんせいのありがたいおはなし

### 1. 社会科学の現代の古典といわれる名著を一冊読みましょう。

現代の古典＝第二次世界大戦後のもので、今まで生き残ってきたもの。

### 2. 解説書の類はおススメしない。

→原著を読みましょう。(翻訳でよい。)

→面白い本になればなるほど考えてしまっても進まない。

だが、そこがいい。

以下は高橋氏お薦めの著書一覧。

内容については聞いてくれればお答えします。…俺の機嫌が良ければ。

1) ミシェル・フーコー『監獄の誕生ー監視と処罰』新潮社

2) カール・ポラ(ン)ニー『大転換』東洋経済新報社

3) バリントンシャムア Jr.『独裁と民主政治の社会的起源1・2』岩波書店

4) ステュアート・ヒューズ『大変貌』みすず書房

5) トウオーラーステイン『近代世界システム1・2』岩波書店

6) E・H・エリクソン『ガンディーの心理1・2』

以上ですお疲れさまでした。誤字や脱字、抜けている個所や誤りがあつたらそつと教えてください。